

## JSLの子どもと特別支援学級に在籍する モノリンガルの子どもの和語動詞産出の比較

池田香菜子（お茶の水女子大学大学院生）・西川朋美（お茶の水女子大学）・  
青木由香（富山県西部教育事務所外国人相談員）

### 要 旨

日本語を第二言語とする（以下、JSL）子どもを対象とした習得研究は、近年少しずつ増え始めている。本稿では、JSLと日本語モノリンガル（以下、Mono）の子どもの語彙力の比較研究を行った西川・青木・細野・樋口（2015）、西川・細野・青木（2016）の報告に、特別支援学級に在籍する日本語モノリンガル（以下、特Mono）の子どものデータを新たに加え、JSLと特Monoの和語動詞の産出における類似点・相違点の検証を試みる。分析の結果、全体的な成績において、JSLと特Monoは同様の傾向を見せたが、何を苦手とするかという点においては、異なる特徴が観察された。学校現場におけるJSLの子どもの日本語指導の体制や内容を考える上で、適切な言語能力の評価は必要不可欠であり、本研究で示されたようなJSL・特Monoの言語発達の違いが今後もさらに解明され、評価の指標の一つの手掛かりとなることが期待される。

【キーワード】 年少者日本語教育 特別支援 和語動詞 産出 評価

### 1. はじめに

多文化化・国際化が進む日本では、日本語を第二言語とする（Japanese as a Second Language、以下、JSL）子どもが年々増えている。自然習得環境で日本語を学ぶ子どもたちは、2年ほどで日常生活に必要な会話力を身につけていくが、学校の授業に必要な学習言語能力の習得は、日常生活の会話よりも時間がかかると言われている（Cummins 2000）。また、移民国家であるカナダでは、バイリンガルの子どもの学業不振が、学習障害によるものなのか、それとも第二言語が発達途上であることが原因なのか、判断が難しいという教師の声も報告されている（Cummins 1984）。このような状況の中、近年欧州や北米などでは、バイリンガルの子どもの言語評価の手掛かりとなる基礎研究として、言語学的側面からバイリンガルの子どもの特異的言語発達障害（Specific Language Impairment、以下、SLI<sup>1)</sup>）のモノリンガルの子どもの言語習得に関する実証的比較研究が行われており（Paradis 2004など）、バイリンガルとSLIの子どもの言語能力には共通点及び相違点があることが分かっている。こうした量的でシステムティックな基礎研究の蓄積は、バイリンガルの子どもの適切な言語能力の評価への

有益な示唆となり、教育現場への貢献も大いに期待されている。

日本に目を向けてみると同様に、JSLの子どもの増加とともに、日本語の習得過程にあるJSLの子どもが誤って特別支援学級に送られるという問題が起こっているという（佐久間 2015）。日本でもJSLの子どもの言語能力における基礎研究が望まれるが、そのような研究が十分に蓄積されているとは言えない。西川・青木・細野・樋口（2015）、西川・細野・青木（2016）では、日本生まれ・育ちのJSLが一見簡単そうに見える語彙を知らないという教育現場の気付きから、JSLと日本語モノリンガル（以下、Mono）の子どもの和語動詞の産出を量的に調査している。その結果、JSLはMonoに比べ語彙力が弱いことが明らかになったが、Mono、JSL、及び特別支援学級に在籍するMono（以下、特Mono）の三者の言語力を比較した研究はまだ行われていない。

## 2. 先行研究

日本の特別支援学級には様々な障害を抱えた子どもが通っているが、欧州や北米において、バイリンガルの子どもと障害のあるモノリンガルの子どもの言語能力を比較した研究は、上述の通りSLIに注目した研究が多い。Leonard（2014：3）によると、SLIとは「言語能力において著しい制約がある障害だが、聴覚障害、非言語性知的障害、神経系の障害などによって引き起こされるものとは異なる（筆者訳）」とされている。SLIの原因に関する捉え方は様々だが、英語だと三人称 [-s] や過去時制 [-ed] などの屈曲形態素を統制する文法的特性が習得できないとされる「文法障害仮説」が要因の一つとして考えられている（Otomo 2016；村尾・伊藤 2012）。

欧米言語におけるバイリンガルとSLIの実証的比較研究は数多く存在し、扱う言語項目も多様であるが（スウェーデン語・語順、Håkansson & Nettelbladt 1993；フランス語・目的語接語、Paradis 2004；英語・文法的形態素、Paradis 2005など）、全てにおいて共通している結果は、SLIの子どもの言語発達はバイリンガルの子どもに非常に似ているという点である。例えば、Paradis（2005）では、英語を第二言語とするバイリンガルの子どもを対象に文法的形態素（現在の習慣を表す三人称 [-s]、規則動詞の過去形 [-ed]、不規則動詞の過去形など）について、産出テスト（言語障害を同定するための標準化テスト<sup>2)</sup>）などのデータを分析した。その結果、バイリンガルの成績は、標準化テストの基準に照らし合わせると（言語障害がないにも関わらず）SLIと判断されるスコアの範囲内であるケースが多いことが分かった。また、全体的な成績だけでなく、誤用にもバイリンガルとSLIの子どもの間に同様の傾向が見られたことを報告している。一方で、両者の相違点に触れている研究の例として、フランス語の目的語接語の習得に関する調査を行ったParadis（2004）がある。バイリンガルとSLIの全体的な傾向は似ているとしながらも、バイリンガルは、SLIや健常児のモノリンガルよりも強代名詞（strong pronoun、ça）の過剰使用が見られ、この傾向は第一言語であ

る英語からの転移による可能性が高いと主張した。SLIの研究には、特定の文法項目の使用が必須となる義務的文脈 (obligatory contexts) に注目した研究が多い。英語を例に挙げると、三人称や動詞の時制の継続的な間違いがSLIを判断するための指標となり得るが、日本語の場合、主語や格助詞などは会話で省略されることも多いため、その判断が難しいとされている (Otomo 2016)<sup>3)</sup>。

このように、欧米言語ではSLIとバイリンガルの子どもの言語習得に関する比較研究が盛んに行われているものの、日本語では、客観的なデータに基づいたJSLと (SLIに限らず) 障害がある子どもの比較研究は管見の限り見当たらない。そこで、本稿では、MonoとJSLの子どもの比較した西川他 (2015、2016) のデータに、同論文で分析から除外した特Monoの子どものデータを加え、和語動詞の産出におけるJSL・特Monoの類似点・相違点を検証することを目的とする。日本における本研究分野の出発点として、子どもたちの言語習得の実態を分析的に示すことで、JSLの子どもの言語能力をどのように評価すればよいのかといった課題を抱える教育現場に貢献できると考える。本稿では、基本的に語彙に焦点を当てるが、欧米言語を扱った先行研究の知見を得ながら、それ以外の言語項目についても触れていきたい。なお、本来であれば、比較対照群をMonoのSLIに絞り調査を行うのが適当であると考えられるが、上述のように、日本語ではSLIの判定が難しくまた教育現場での診断実績や関連する研究も十分ではない。また、後述するように、本調査では特Monoの障害を同定するテストや障害種別に関する情報を得ていないため、SLIに限定せず、“特別支援学級に在籍するモノリンガルの子ども”を対象とする。

### 3. 研究方法

本分析の主な対象者は、日本の公立小中学校に通うJSL、特Monoである。参考データとするMonoも含め、データの大半は4つの小学校における全校調査によって得た (年度をまたいだため、前年度末の小6は中1として扱う)。本稿で分析対象とするのは、小2～中1の計1,509名 (JSL 163名、特Mono 13名、Mono 1,333名) である。本稿におけるJSLの子どもとは、「両親、あるいは、一方の親が日本語母語話者ではない家庭の子ども」を指し、家庭言語は主に、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、タガログ語、中国語、タイ語、韓国語などである。また担当教員による日本語評価が行われており、教員等が「日本語母語話者の子どもと変わらない」、あるいは「発音に特徴があるけれど、それ以外は日本語母語話者の子どもと変わらない」と評価した子どものみを分析対象としている (滞日歴5年未満の子どもは含まない)。イラスト付き記述式調査票を用い、Monoであれば比較的早い段階で習得すると思われる和語動詞31語 (表1) の産出力を測定した。想定した動詞以外に、日本語として自然な回答も正答としている。調査負担を考慮し、小2・3は40アイテムの調査票<sup>4)</sup> (西川他2016を参照)、小4～中1は70アイテムの調査票を用いた (西川他2015を参照)。

表1 調査対象とする動詞31語

あく、あける、あげる、あるく、おちる、およぐ、かける、かぶる、きる、くれる、 こぐ、ころぶ、さく、さす、しまる、しめる、すわる、たおれる、たく、たつ、た てる、とる、ぬぐ、はく、はしる、はずす、ひく、ほどく、むすぶ、もらう、よむ
--

特Monoは、小3が2名（対象者3A、3Bとする、以下同様）、小4が3名（4C、4D、4E）、小5が3名（5F、5G、5H）、小6が2名（6I、6J）、中1が3名（7K、7L、7M）の計13名である。本調査は、本来JSLと特Monoの比較のために設計・実施された調査ではないため、障害種別を聞くことはしなかった。3B・5Hは自閉症・情緒障害学級、6Jは知的障害学級に在籍し、他は特別支援学級の在籍であることのみ判明している。なお、3Aは小3（40アイテム調査票対象者）であるが70アイテム調査票で回答、4Eは小4（70アイテム調査票対象者）であるが40アイテム調査票で回答したため、学年別の得点では、3Aは全回答のうち該当する40アイテムを分析対象とし、4Eは分析対象外とした（アイテム別正答率の分析では全ての回答を対象としている）。

## 4. 結果と考察

### 4. 1 学年別の得点

表2は学年別の得点である。全体的にMonoの平均点は非常に高く、JSLの平均点・最低点は、小3の最低点がMonoと同じであることを除けば、全ての学年においてMonoよりも低い。特Monoの得点は、12名全員が同学年のJSLの最低点を上回っており、2名（6J・7L）を除き同学年のMonoの得点の範囲内であった。本研究ではMonoが母語習得過程で自然に身につけるであろう簡単な語を扱っているため、妥当な結果だと言える。一方で、少人数での限定的な議論にはなるが、特Monoの学年別の平均点は、数値的にはMonoよりむしろJSLに近いと言える。

### 4. 2 アイテム別正答率と誤用分析

次に、JSLと特Monoの正答率の低いアイテムに注目し、それぞれが苦手なアイテムの特徴について考察する。正答率90%未満を“低い”としたところ、計44アイテムが該当した。それらを、**[a]** JSLのみ正答率が低いアイテム、**[b]** 特Monoのみ正答率が低いアイテム、**[c]** JSL・特Monoともに正答率が低いアイテムに分類した（表3）。

まず、JSL・特Monoともに正答率が低いアイテム（= **[c]**）は22アイテムあり、全体（表3）の半数を占める。一方で、JSLのみ正答率が低い **[a]** を見ると、「ご飯をたく」「水をきる」などの主に家庭場面での動作を表す動詞や、「帽子をかぶる」「靴をぬぐ」などの着脱動詞が多く見られた。西川他（2015）では、家庭でよく使われる用法など使用場面が限られるアイテムや、母語の影響<sup>5)</sup>を受けていると考えられる着脱動詞等のアイテムは、JSLが苦手とする傾向があると述べている。本分析でも、特Mono

表2 学年別の得点

	学年	Mono			JSL			特Mono		
		最低点	最高点	平均 (人数)	最低点	最高点	平均 (人数)	対象者	得点	平均 (人数)
全40 アイテム	小2	22	40	36.51 (201)	17	38	25.40 (10)	該当者なし		
	小3	20	40	37.75 (208)	20	39	32.83 (18)	3A	31	35.50 (2)
								3B	40	
全70 アイテム	小4	51	70	66.74 (257)	49	70	62.46 (24)	4C	60	60.50 (2)
								4D	61	
	小5	50	70	67.14 (265)	41	70	61.21 (34)	5F	55	58.67 (3)
								5G	52	
								5H	69	
	小6	59	70	68.07 (240)	8	70	63.00 (44)	6I	63	56.50 (2)
								6J	50	
	中1	62	70	68.72 (162)	44	70	62.77 (22)	7K	68	62.00 (3)
								7L	51	
7M								67		

表3 JSL・特Monoの正答率が低いアイテム

[a] JSLのみ正答率が低い8アイテム	[b] 特Monoのみ正答率が低い14アイテム
帽子をかぶる (83.1, 100) 目薬をさす (77.5, 92.3) 電話をかける (87.3, 100) ご飯をたく (80.3, 92.3) 靴をぬぐ (88.7, 100) 風で木がたおれる (81.5, 90.9) 水をきる (85.9, 92.3) ズボンをはく (88.7, 92.3)	スピードがおちる (91.1, 63.6) 電話をきる (92.3, 69.2) 汚れがおちる (91.1, 72.7) リンゴが木からおちる (98.4, 81.8) 帽子をとる (92.3, 76.9) ひもをむすぶ (96.8, 81.8) 風邪をひく (99.3, 84.6) 新しい家がたつ (95.2, 81.8) 家をたてる (94.4, 81.8) 椅子からたつ (93.5, 81.8) 魚を串にさす (90.3, 81.8) プレゼントをくれる (90.3, 81.8) プレゼントをもらう (90.3, 81.8) 眼鏡をとる (93.0, 84.6)
[c] JSL・特Monoともに正答率が低い22アイテム	
*指で黒板をさす (82.3, 27.3) 泡がたつ (84.7, 45.5) *辞書をひく (74.2, 45.5) 布団をかける (88.0, 69.2) *そりをひく (71.8, 53.8) 掃除機をかける (84.5, 69.2) ボタンをかける (87.1, 72.7) 泡をたてる (75.8, 63.6) *ボートをこぐ (65.5, 53.8) 網をひく (87.3, 76.9) スイッチをきる (85.9, 76.9) シートベルトをしめる (81.5, 72.7) *旗をたてる (62.9, 54.5) 靴ひもをほどく (80.6, 72.7) ドアがしまる (85.9, 84.6) 橋をかける (78.2, 76.9) 日がさす (74.6, 76.9) ハンガーに服をかける (80.3, 84.6) コンセントにさす (78.2, 84.6) *ボタンをはずす (74.2, 81.8) *トランプをきる (56.3, 69.2) *ハチマキをしめる (57.3, 72.7)	

注：( )内は、前者がJSL、後者が特Monoの正答率を表しており、JSLと特Monoの正答率の差が大きいものから順にアイテムを並べている。(\*)は、Monoの正答率も低かったアイテムである。



の正答率がJSLより低いアイテムが全体的に多い中、家庭語彙・着脱動詞等に関しては特Monoの正答率がJSLより高いアイテムが目立った。

【b】の特Monoが苦手とするアイテムには「家がたつ」「家をたてる」などの自他動詞、「(お母さんがわたしに) プレゼントをくれる」「(子どもがお母さんに) プレゼントをもらう」などの授受動詞が見られた。「汚れがおちる」に対し、3A・6Jが「汚れがおとす」と回答、また「ドアがしまる」に対し、6I・7Lは「ドアがしめる」と回答していた。授受表現においても、「プレゼントをもらう」では5F・5Gが「プレゼントをくれる (た)」と回答した。これらの傾向から、自他動詞・授受動詞の混同、または助詞の知識の不足などが考えられるが、例に挙げた回答は必ずしも特Mono特有というわけではなく、MonoやJSLにも同様に見られた<sup>6)</sup>。

また、【b】には、「椅子からたつ」「スピードがおちる」などのイラストが分かりにくいと思われるアイテム(図1)も含まれていた。特Monoは、MonoやJSLに比べ、特に、想像力を働かせて実際の状況を思い描く、絵から物事の前後関係を判断するといったことを苦手とし、そのことが原因で正答が出来なかった可能性がある。

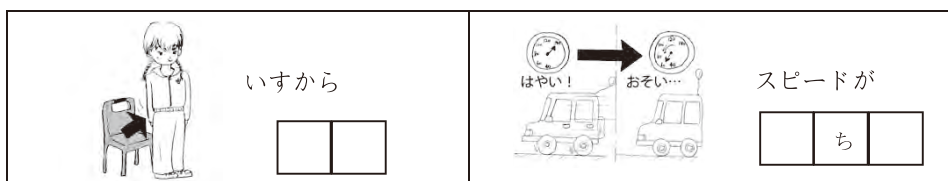


図1 イラストが分かりにくいと思われるアイテム

## 5. まとめ

本分析結果から、JSLと特Monoの間には類似点と相違点のどちらも存在することが明らかになった。まず、類似点として全体的な合計得点の傾向が挙げられる。特Monoの得点は概ねMonoの学年別の得点の範囲内であったものの、平均点はMonoよりむしろJSLの平均点に近かった。このように一見得点と同じように“低い”場合、それが第二言語特有の言語発達の過程にあるものか、または何らかの障害によるものかが判断しにくく、その難しさが佐久間(2015)で言及された健常児であるJSLの子どもの誤診に繋がっているのではなかろうか。

しかし、アイテム別の正答率に着目すると、JSLと特Monoの間で違いも見られ、何を不得意とするかという点で異なる傾向を見せた。JSLが苦手とするアイテムは西川他(2015)で指摘されたように、家庭場面がよく使用されるであろう動詞や(一部母語の影響が考えられる)着脱動詞などであった。これらはJSLがバイリンガル環境で育っているために、場面による言語の使い分けや二言語間の干渉が生じた結果であると考えられる。一方で、特Monoはイラストが分かりにくいアイテム、絵から状況を思い描くのが難しく認知的に負荷が大きいと思われるアイテムを苦手とする傾向が見

られた。これは、特Monoの語彙知識そのものに問題があるというよりイラストの認識や回答方法に困難を感じた可能性も高い。このJSL、特Monoそれぞれに見られた傾向の違いは、今後さらなる研究を積み重ねていく上で重要な一つの判断の指標となり得るだろう。

また、特Monoは授受・自他動詞、助詞の知識が影響したと考えられるアイテムにおいても正答率の低さ・誤用が目立ったが、同様の誤用はMonoやJSLにも見られたため、先述した相違点はもちろん、アイテム別正答率や誤用における類似点にも目を向けながら、今後三者の言語発達の特徴をさらに詳細に捉えていく必要がある。

本稿では、JSLと特Monoの比較から和語動詞の産出における類似点・相違点を示したが、課題も多く残る。まず、比較対象となる特Monoの人数を増やし、障害種別を事前に把握した上で調査を行うことである。障害が言語能力にどのように影響するかは、障害種別によって大きく異なると考えられる。また、特Monoだけではなく、特別支援学級に在籍するJSLの子どもがどのような言語上の問題を抱えているのかについても個別に調査する必要がある。さらに、本調査では記述式タスクを使用したのが、先行研究の多くは言語的な負担を考慮し口頭での産出タスクを行っているため、今後の調査では測定方法についても検討する余地がある。そして、先行研究の知見を生かし、語彙力だけではなく助詞をはじめとする日本語の文法項目に着目した調査も望まれる。将来、Monoとの比較だけではなく特Monoとの比較によってJSLの子どもの言語発達の傾向が多角的に解明され、蓄積される必要があるのは言うまでもない。本研究は上述のように多くの限界はあるものの、今後のJSLの子どもの適切な言語評価、言語能力の臨床的判断に資する研究の第一歩として、JSLと特Monoの子どもの和語動詞の産出を比較したその意義は大きいと考える。

## 注

- 1) SLIの子どもには、モノリンガル、バイリンガルのどちらの子どもも存在するが、本稿では、SLIのバイリンガルの子どもについては扱わないため、SLIという表記の際には、モノリンガルの子どものみを指す。
- 2) Rice & Wexler (2001、Padadis (2005) より引用) によって開発されたテスト (TEGI: Test of Early Grammatical Impairment) で、基本的にはモノリンガルを対象としている。
- 3) しかし、日本語モノリンガルSLIの子どもの言語発達を言語学的観点から調べた研究も、近年わずかであるが行われている (村尾・伊藤 2012を参照)。
- 4) 視覚的に分かりやすい動作動詞、着脱動詞、自他動詞等を優先的に選んだ。
- 5) JSLの誤答には「服をぬぐ」「靴をぬぐ」を「とる」とするものが顕著に見られたが、JSLの家庭言語の大半を占めるブラジル・ポルトガル語の日常会話で、「(服・靴を) ぬぐ」に用いられる動詞tirarは、普段「とる」と訳されることが多いこ

とから、この誤答はJSLの母語の影響である可能性が高いと考えられる（西川他2015）。

- 6) 「汚れがおとす」と回答したMonoは1,333名中38名、JSLは163名中9名、「ドアがしめる」と回答したMonoは47名、JSLは24名、「プレゼントをくれる（た）」と回答したMonoは7名、JSLは0名であった。

## 参考文献

- 佐久間孝正（2015）『多国籍化する日本の学校—教育グローバル化の衝撃』勁草書房
- 西川朋美・青木由香・細野尚子・樋口万喜子（2015）「日本生まれ・育ちのJSLの子どもの日本語力—和語動詞の産出におけるモノリンガルとの差異—」『日本語教育』160、64-78
- 西川朋美・細野尚子・青木由香（2016）「日本生まれ・育ちのJSLの子どもの和語動詞の産出—横断調査から示唆される語彙力の『伸び』—」『日本語教育』163、1-16
- 村尾愛美・伊藤友彦（2012）「日本における特異的言語発達障害研究の今後の課題」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』63（2）、139-144
- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (2000). *Language, power and pedagogy: Bilingual children in the crossfire*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Håkansson, G., & Nettelbladt, U. (1993). Developmental sequences in L1 (normal and impaired) and L2 acquisition of Swedish syntax. *International Journal of Applied Linguistics*, 3(2), 131-157.
- Leonard, L. B. (2014). *Children with specific language impairment* (2nd ed.). Cambridge, MA: MIT Press.
- Otomo, K. (2016). Assessment of language development in children with hearing impairment and language disorders. In M. Minami (Ed.), *Handbook of Japanese applied linguistics* (pp. 337-366). Boston/ Berlin: De Gruyter Mouton.
- Paradis, J. (2004). The relevance of specific language impairment in understanding the role of transfer in second language acquisition. *Applied Psycholinguistics*, 25(1), 67-82.
- Paradis, J. (2005). Grammatical morphology in children learning English as a second language: Implications of similarities with specific language impairment. *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 36, 172-187.

本調査にご協力いただいた学校・支援団体の関係者のみなさまには、心より感謝申し上げます。

本研究は、次の補助金を受けて行った研究の成果の一部です：『日本語を母語としない子どもの語彙とコロケーションの知識に関する研究』2011～2015年度、科学研究費・基盤研究C、課題番号23520619、研究代表者 西川朋美